

<実践研究>

視覚障がい者のおしゃれの意識についての一事例
—施設入寮者のスポーツ愛好者Aさんの場合—

大森 宏一¹

The study about the stylish visual disorder person

～ Case study of entrance to a dormitory person of facilities woman sports fan Ms. A ～

Kouchi Oomori¹

Abstract

This study, persons with visual impairments, and a survey focused on awareness of Ms.A. A's fashionable, especially amblyopia. Ms. A, that freedom is restricted in daily life that does not possess a driver's license and vehicle facilities and dormitories. The study, conducted by interviews in the interview for Ms.A. Ms.A of the subjects was positive for high consciousness very fashionable. For subjects, stylish, will enhance the quality of life was regarded as positive for the presence of his own. Stylish addition, the treatment of incurable diseases and said she could understand if people around the person and also an awareness of the severe disabilities.

In future, the idea that there is a need to investigate and support the person with people with severe disabilities.

1. はじめに

2008(平成20)年度に出された厚生労働省社会・援護局障害福祉部企画課(2008)¹⁾のまとめによると身体障がい者^{註1)}数は1980(昭和55)年以降増加傾向にあり、2006(平成18)年度の調査では3,483,000人に昇っている。

障がいの程度についてみると、1・2級の重い障がい者を有する人数は1,675,000人で身体障がい者総数の48.1%を占め前回の調査²⁾に比べてその割合が増加している。

中でも視覚障がい者は、192,000人で62.0%となっており、聴覚・言語障害者112,000人(32.7%)、肢体不自由者761,000人(43.2%)、内部障害者610,000人(57.0%)と比べると割合としていけば多い。

しかし、重度の視覚障がい者の不自由さは障がいの程度だけでは表わすことができない事項もあ

る。例えば、全盲と弱視者では違うことをあまり考えられていない実情もあり、倉本は³⁾視覚障がい者の中でも弱視者について「拡大文字をはじめとする弱視者に対応したメディアの認知度は極めて低い。それどころか、弱視者が、全盲者とは異なる独自のニーズをもった集団であることそのものが、一般にはあまり理解されていないように思われる。視覚障がい者といえば点字と盲導犬しか思い浮かべることのできないような貧困なる想像力を、人びとが省みることには少ない。そうした状況は、10年前もいまも大きくは変わっていない。取り残された弱視者は、時に全盲者よりしんどい立場におかれるのである。」と述べている。

このように、障がいを持った当事者からすれば全盲と弱視において周囲の社会的要因からくる生活の質の充実感において違いがある。

本研究では、視覚障がい者の中でも弱視者に

1 夙川学院短期大学児童教育学科 Dept. of Child Education, Shukugawa Gakuin College

視点を当て、おしゃれ^{註2)}をすることによってQOL^{註3)}が向上することができるようになることを明らかにすることを目的とした。

これまでの筆者の研究(2010)⁴⁾では、1人の車いすの身体障がい者アスリート(肢体不自由)にスポットを当てておしゃれをすることによってQOLが向上することを明らかにした。

ただしここでは、本人のおしゃれに対する高い意識と、自動車運転やスポーツ活動などほとんどを自立的に実施できるという条件がそろっていることが反映されていた。

そこで今回は、身体障がい者の中でも一番重度の割合が高く、運転免許の取得が難しい弱視の視覚障がい者で、職業訓練センターに入寮しているスポーツ愛好者の学生Aさんを事例に報告する。

対象者のAさんは、自動車の免許取得が困難なだけでなく、施設に入寮しているという環境から、おしゃれに対してまた外出等の行動面に関しても自由度が制限されている。さらに、学生という立場上においても経済的におしゃれにお金をかけることが難しいと考えられる。

筆者(2010)の研究⁴⁾では「障がい者はおしゃれに関心のない人多すぎる」や「障がい者であるために、おしゃれに対して介助者が大変なので遠慮することがある」という被験者の声から、障がい者本人と介助者がおしゃれに対して高い意識を持っていないとおしゃれをすることが困難であると述べている。

さらに岩波(1996)⁵⁾は「どんな服が着たい?とかどんな色が好き?と聞いても『わからない』という答えが返ってくるのが少なくありません。

このことはもともと障がい者の人たちは自分の着るものに関心がないのではなく、そのようなことにふれる機会が少ないことからきているのではないかと思います。」と述べている。

このことから、障がい者本人の意識と介助者の意識が高くないとおしゃれとすることが難しいと考えられる。

ここでは「障がい者は、本人と介助者がおしゃれに対して特に高い意識を持たない限り、身体的状態、社会的環境がバリアとなり、おしゃれに対して消極的になってしまう」との仮説をたて、お

しゃれをすることによってQOLが向上すると仮定し、障がい者がおしゃれに対してより積極的になるにはどのような意識を持てばよいのかをインタビュー調査により検討した。

2. 研究方法

(1) 調査の概要

1) インタビュー法による聞き取り調査

視覚障がい者によって、生活上の個別ニーズが多様であることは述べた。そのため障がい者を対象にする場合、大規模な統計調査よりも個別ニーズが多様であることを鑑みてこのようなインタビュー調査による質的研究を積み重ねていくことが重要であると考えられる。

質的研究の重要性について、藤田(2010)⁶⁾は身体障害者に対して質的研究を行う意義を「当事者の『語り』を通して『障害の意味』をとらえることができる」とし、「さらに『この先、先天性身体障害者の語りに関する研究が望まれる』」。と論述し、さらに質的研究は、「客観性には乏しく標準化も困難であるが、個々の障がい者の思いや語り、当事者にとっての障がいの意味をとらえることは非常に有効な方法論であるとおもわれる。」としている。

2) 対象者

本研究では、H県K市における視力障害センターにおいて鍼灸師・あんまマッサージ指圧師を目指している国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局 神戸視力障害センターの専攻科(3年制)の学生でスポーツ愛好者のAさん(インタビュー時19歳)を対象とした。

またAさんには、人権擁護上の配慮、不利益・危険性の排除として、本研究での質問に対して「答えたくない事柄、また答えることによって不利益・危険性を伴うと感じた場合は答えなくてもよい」ということをはじめに伝えインタビューに応じてもらった。

さらに倫理上の配慮としてAさんであることが限定されると不利益や危険性があると考えられる事柄についての詳細な記述は避けた。

① 対象者Aさんについて

Aさんは、小学校の視力検査において原因不明の網膜色素変性症^{註4)}という障がいであることが

わかった。これは進行性の難病指定をされている病気である。小学校、中学校は普通学校に通っていたが、高等学校から特別支援学校に通うようになった。

私生活においてはスポーツが好きで、小学校より柔道や陸上競技など行っている。

② 対象者の選考理由

Aさんを対象としたのは以下の理由からである。

まず、インタビューによる1時間から2時間の拘束時間が本人の負担にならないこと。

そして、19歳という思春期・青年期と特有の自分がどのように見られているか、という他者からの評価を意識する時期であると判断した。

さらにこの年齢の女性であることから特におしゃれに対する意識が高くなっていると推測してAさんが適切であると判断した。

また、スポーツ愛好者であることも対象理由とした。障がい者であってもスポーツを行うときは、人前に出ることが多いこと、練習等においても多くの人とかかわりがあると考えたためである。

表1 Aさんについて

性別	女性
年齢	19歳
既婚歴	なし
現在の職業	学生（国立K視力障害センター）3年制 鍼師、灸師、あんま・マッサージ・指圧師
希望の職種	ヘルスキーパー（企業内での鍼灸・マッサージ師）
過去の既往歴	なし
病気・障害について	網膜色素変性症 小学校1年時の視力検査にて判明 原因不明 進行性で現在は視力 右0.04 左0.08 視野狭窄 夜盲 色弱ではないが、明るさによって色を間違える場合がある
障害等級	1種2級
体調について	視力障害以外は異常なし
日常生活について	日常生活介助の必要はなし、ただし暗い場所、人込みでは危険なため白杖を持っている
現在の生活	障害者センター内の寮にて入寮中
生活について	土日以外は、学業。月曜日から金曜日までの授業時間 8:50から3:10まで授業 寮の食事時間朝食 8:00 昼食 12:30 夕食 17:30 入浴 3:30～21:30 点呼 10:00 消灯時間は特に決められていない。部屋は個室
平日時の自由時間	平均6時間
恋人の有無	有
移動手段	徒歩
自家用車の有無	なし
スポーツ歴	小学校より中学2年まで柔道 自宅近くの道場にて 初段 中学校では3年間学校の部活動にて陸上部に所属し砲丸投げの選手として活躍（全国大会上位入賞、近畿大会上位入賞・JOCジュニアオリンピック陸上大会上位入賞） 高校生からフロアーバレー ゴールボールなどを始める 高校2年生からブラインドサッカーを始める 現在Hチームに所属し近隣県内では唯一の女性メンバーである Kリーグにて新人賞受賞
アルバイト	なし
クラブ活動時間	ブラインドサッカー 視力センターにて 週1回 90分 県内所属のクラブチーム月4回（土曜日）3時間程度 ゴールボール 視力センターにて 週1回 90分
ひと月の収入	6万5千円（障害者年金）
ひと月に使うお金	5千円から1万円
おしゃれに使うお金（月）	2千円から3千円

3) 調査日時

インタビュー調査は面接法とし、2回行った。第1回目は2011(平成23)年2月24日(木)16:10~17:30、第2回目は翌日の2月25日(金)15:30~17:30である。

第1回目は、Aさんとのコミュニケーションが主でAさんと筆者との信頼関係を深めるためAさん自身の障がいのことやこれまでの生活などをインタビューした。また2回目に行う質問事項の内容を知らせて終了した。

第2回目は、本題としておしゃれの意識調査をインタビューした。

4) インタビュー調査の場所

視力障害センターの教官の個人研究室を借用して、1対1の面接法により実施した。

5) インタビューの内容

インタビューでは下記の項目を質問事項とした。

①おしゃれは、普段からしているか。②おしゃれするときにバリアになっているものは。③おしゃれについてどう思うか。④寮に入ってから、おしゃれは変わったか。⑤障がい者が、おしゃれをもっと楽しむための課題は。以上の5項目をインタビューで尋ねた。

3. 結果および考察

(1) インタビュー時のAさんの外見の様子と初対面での印象

第1回目のインタビュー時にAさんは、ワン

ピースにハイソックスをはいて若者らしいが派手ではない清潔感のある服装であった。

このインタビューでは、Aさんとの信頼関係の構築を得るため、このインタビューの趣旨やAさんの障がいのことやこれまでの生活について情報を聴取した。

第2回目のインタビューでは、違う服装をしており半そでシャツと長そでシャツの2枚を重ね着していた。そのことを聞くと、同じような服でもこのように重ねたりアレンジしてりして違う感じに見えるようにしていると話した。

またスカートは盲学校時代の制服の丈を短くして着用しており、1回目とは違うニーソックスをひざ上まであげて着用していた。

こちらのインタビューに対しては、どの質問にも答えてくれた。はきはきとした受け答えと答え方、さらにその内容から、Aさんは、幼少時から元気で活発な子どもであったことが伺えた。

特に障がいのことや病気のことについても嫌がるそぶりを見せず、はっきりと答えてくれた。このため非常に若々しく元気な女性という印象を持った。

(2) インタビュー調査の結果と考察

1) Aさん自身のこれまでの生活や障がいのことについて

Aさんは、小学校に入るまで、両親も視覚に障がいがあるとは思っておらず、当時の健康診断によって、病気が判明した。両親はそういえば思い

表2 インタビュー項目について

No	項目	設問理由
①	おしゃれは、普段からしているか	おしゃれに関する意識の高さを象徴する項目であると考えた。
②	おしゃれをするときにバリアになっているものは	障がいがあるがためにバリアになっているものがあるとすればそのことが、完全な社会参加への重要な解決ポイントとして課題になると考えた。
③	おしゃれについてどう思うのか	対象者にとって、おしゃれをどのように考えているかを知ることと他の障がい者のおしゃれについても思いが聴けるのではないかと考えた。
④	寮に入ってから、おしゃれは変わったか	自宅での生活と、寮生活でのおしゃれに対するの違いを聴き、制限のある生活においてのおしゃれの変化を知る1つの手段としてこの項目を考えた。
⑤	障がい者が、おしゃれをもっと楽しむための課題は	実際に、対象者がよりおしゃれを楽しむための具体的な課題を明確にするためにこの項目を考えた。

当たる節があると記憶している程度であった。

現在の視力は、右 0.04、左 0.08 であるが視野狭窄がある。また暗くなると見えにくくなる。第 1 回目のインタビュー終了時間の 17:30 過ぎには廊下を歩くことが難しくなるということであった。

ただし暗くても光るものは見えるということ、花火や夜景は見えるということであったが、星は見た記憶がないと言っていた。

弱視ではあるが、文字は、ポータブル拡大読書機（クイックルック）を使用して読むことができる。教科書のような文字もそれによって読むことができる。携帯電話のメール機能も使いこなすことができる。

実際、インタビューの後にメールのやり取りを行ったが、こちらのお礼メールに対してすぐに返信してくれた。

A さんは、中学まで普通の学校に通っており、高等学校から盲学校に通うようになった。

これは、A さんの障がい進行性の難病であり中学校までは教科書が読めたが、高等学校に通うころにはそれが難しくなったことによる。

スポーツについて尋ねると A さんは、「スポーツは見ることもすることも好き」と答えてくれた。友達とプロ野球やサッカーの応援をしたりすることもあると答えた。

野球やサッカーだけでなくスポーツ選手が好きでいろんな選手を見たりすることも刺激を受けるので好きであると言っていた。

また A さん自身のスポーツ歴は、小学校から柔道をしており初段の腕前である。中学校では、3 年間陸上競技部に所属し砲丸投げで全国大会でも上位入賞をしている。

JOC ジュニアオリンピック陸上競技大会にも出場しこちらも砲丸投げにおいて上位入賞を果たしている。

盲学校時代から、フロアバレー、ゴールボール、ブラインドサッカーを始めた。現在はブラインドサッカーに力を入れており、近隣県内では唯一の女性メンバーとしてクラブチームで活躍している。地域の K リーグにおいて新人賞を受賞するほどの腕前である。

A さん曰く、ブラインドサッカーは、今までい

ろいろとスポーツをしてきたが唯一ほめられなかったことが逆に彼女の闘争本能に火をつけたようである。A さんのスポーツに対する能動的な姿勢が伺えた。

現在の自由時間について尋ねると、寮内ではあるが時間は 1 日平均 5～6 時間あるという。

その使い道であるが、テレビを見たり、音楽を聴いたり携帯電話でインターネットの小説を読んだりして過ごしている。

また、インターネットで、ファーストフード店のクーポンを探したり、美容室のクーポンを探したりして、安いお得な情報収集をして楽しんでいる。

2) 「おしゃれは普段からしているか」という質問に対して

① 全般的な回答

毎日している、と答えた。寮にいても同じものを 2 日続けて着ないようにしている。

これは第 1 に清潔に見られたい、第 2 に服装の組み合わせを行ってたくさん服を持っているように見せたい、さらに自分の服を見てくれた人の反応を見て楽しみたいと答えた。実際に 2 回目のインタビュー時の重ね着がそれであり、そのようにしておしゃれを楽しんでいることを垣間見ることができた。

さらにスポーツをするときは、特に人と同じ格好をするのが好きではないと答えた。ブラインドサッカーではアイマスクを使用するが、従来ある青色のものではなく、ピンクにアレンジして（母親につくってもらったと話していた）つけていると言っていた。

またここでも、自分の服装を口に出して言ってくれる人がいるのでそのような人の反応を見て楽しんでいる自分がいると話してくれた。

A さんはおしゃれをして自己満足するだけではなく、他人の反応を見て楽しむことで生活をより豊かにしているように思われた。

③ 髪型についての回答

髪は、カラー（毛染め）を入れるのが好きであると答えた。2、3 か月に 1 回ほど美容室に行っで染めると言っていた。

これは、A さん自身、白髪が多いということもその理由であると答えた。ただ自分では、白髪の

ことはあまり気にしていないという。また、安いところを探して染めているが、インターネットを使ってクーポンを見つけたりすることも楽しんでいるという。Aさんは、「今度1,000円で染めてくれるところを見つけた」と言って笑顔で答えてくれた。

④メイクについての回答

メイクについては、「しない」と答えた。理由は、うまくできないし、下手にやったら何か言われるよりは、やらない方がましとのことであった。

さらに、メイクの道具も一切持っていないとのことであった。リップクリームなどは、唇が荒れたときのために持っていて特に冬場はよくつけるとのことであった。

⑤装飾品についての回答

現在、医療従事者になるために勉強しているので、学校でも奨励されていない。特に「指輪、ピアスなどはしない」と答えた。

またネックレスも使用しておらず、特にこだわりはないと言っていた。

実際Aさんは、装飾品をつけておらず、手首に髪を束ねるためのゴムをしていた。髪止めのゴムには少しこだわりがるようで、アニマル柄のゴムであった。

⑥靴についての回答

靴は、こだわりがあり、履きやすさを重視して高いものでも買うと答えた。

これは、やはり、暗いところや地面が見えにくい、なるべく丈夫で安定感のあるものを履かないと怪我をする危険があるためではないかと考えられる。

⑦考察

現在19歳のAさんは、おしゃれをすることにより自分のQOLを向上させるツールになっているようである。また、もうひとつ、他人の反応を見て楽しんでいるという印象を受けた。本山・岡崎(1996)⁷⁾が「自分は他者からどう思われているのだろうかという他者の中にある自分の発見である」と、あるいは松崎(2001)⁸⁾は「自分ほどのように見えるだろうか」と述べていることから、Aさんは、思春期特有の他者から見られる自分を意識していると思われる。

自分のおしゃれによってどのように他人が反応

をするのかを楽しむことで人とのコミュニケーションをとっており、おしゃれに対して評論してもらうこと自体も楽しんでいることが伺えた。

3)「おしゃれをするときにバリアになっているものは」という質問に対して

①回答結果

お店で、服の色を間違えるときがある。これはお店の照明が暗いところでそうなるので、明るいところまで持って行って見ないといけないことがあると答えた。また、値段表が小さいので見るのが大変なことがバリアであるようである。だから買い物に行くときは、友達と行くと時間がかかって申し訳ないという気持ちがあり、たいていは1人で行くと答えた。

さらに、洋服の日焼けや、ほつれなど気付かずに買ってしまうことがあるという。

加えて、Aさんは、いろいろな店に行くのが好きであるが、店に行くまでに迷うことがあるため、路上において知らない人に道を尋ねなければならぬことがあると言う。Aさんは、知らない人に道を聞くことは苦にならないと言っていた。したがって、Aさんの場合はこのことについては、バリアであるとは考えられないと思われる。

自家用車に乗れないことについても、自分の行きたい場所へは尋ねながらであっても不自由は感じていないため、自家用車に乗れない、持っていないということはあまりバリアと感じてはいないということであった。

②考察

自家用車に乗れないことが、大きなバリアになっていると思われたが、Aさんの場合、知らない人に道を聞くことがあまり苦痛でないという。Aさんにとって、移動手段はバリアに関係がないと考えられる。

しかし店舗において、ショッピングするときには、値札や、買うものの品質については、多少なりともバリアがあるようである。Aさんの場合はこれも、Aさん持ち前のパーソナリティによって店員さんとのやり取りで超えられるバリアであると思われる。

今後、障がいの程度が進みさらに見えにくくなるとバリアができると考えられるが、おしゃれを楽しみたいと思う意識があれば、Aさんの場合は

現在と変わらずにおしゃれをすることができる
と考えられた。

4)「おしゃれについてどう思うか」のという問
いに対して

① 回答結果

Aさんは「おしゃれは気軽に楽しめて、生活を
よくすることのできるもの」と答えた。

さらに、Aさんは「おしゃれは、金持ちでも、
貧乏でも楽しめる。また障がいがあっても楽しめる
もの」と答えた。Aさんにとっては、自己満足
であるとも答えていたが、おしゃれが現在のA
さんの生活を楽しむツールになっていることは
確かである。

さらにAさんは、次のように付け加えている。
「可愛い服を着れば可愛くなれる。服によって
また、色によって精神的なものを左右する。おし
ゃれは服だけではなく、小物や持ち物でもでき
るので、自分に合った範囲で楽しんでいる」と
いう。

また、アニマル柄が好きで、この柄は流行り
を気にせず長く使えるところが気に入っており、
「髪止めや、ストッキングなどアニマル柄の
ものをたくさん持っている」と話していた。

おしゃれについてAさんは、「自己主張の場
である」とも答えている。難しく考えること
ではなく、たとえ重度の身体障がい者であつても、
介助者の理解があれば望めばいくらでもでき
ると答えた。

さらに、難病であっても、おしゃれをす
ることは病気を治すことに比べると簡単なので
出来ることだと思つて言っていた。

たとえどのような状況になつても、おし
ゃれについては「主張してもよいと思う」と話
していた。

② 考察

重度の障がいや、難病であっても「おし
ゃれをすることは、簡単なことである」と言
ったAさんの言葉が非常に印象的であつた。

ベットの上であつてもできるおし
ゃれは様々あり、本人の意識と介助者の理解
があれば出来ることがあるという能動的な考
えを知ることができた。

これは、障がい者だけではなく、難病や、
進行性の病気、末期がん患者などにも当ては
まることではないかと思われる。人生をいかに
最後まで自分

らしく生きるかということを紹介、看護する
人が理解し本人の意向に寄り添うことが重要
であると考えられる。

上記のような考えは、レクリエーションの
基本的な考え方を象徴するものであり、「レク
リエーションは人間らしい生活に欠かせない『
楽しみ』を生み出すさまざまな営みを総称する
ものであり、人の生存権と自由および幸福追
求権に基礎を置いている。」⁹⁾という理念と
合致すると考えられる。

重度の障がいや、難病、末期のがん患者
であっても、出来る範囲で本人が望むならば
おしゃれすることへの支援は「基本的人権」
を守る上でも介護する人や周りの人が理解し
考えなければならぬことであると思われる。

5)「寮に入ってから、おしゃれは変わ
りましたか」の問いに対して

① 回答結果

着る服自体は変わってはないと答えた。た
だし寮では外にでない日がほとんどで寮内は
部屋にエアコンがあるので薄着が多いと答
えた。また、外出するときは近い場所でも
ちゃんとした服に着替えるようになったと
回答した。

自宅にいるときのことを聞くと、実家
では電車に乗ってでかけないかぎりは、
ジャージで過ごしていたようである。実家
は田舎であつたので、あまり派手な格好は
していないと答えた。その理由は目立つ
ということと、知っている人が見ている
のが何となく嫌だったという理由である。
そのかわり電車出でかけるときは、それ
なりにおしゃれをして出かけていたよう
である。

現在は、実家よりも都会的なのできち
んと着替えるようにしていると答えた。

② 考察

ここでもAさんは、他人からどのよう
に見られるかを非常に気にしていることが
伺えた。

Aさんにとってのおしゃれは、自分
ひとりを楽しむものではなく、他人との関
わりにおいて、自分がどのように見られて
いるかということを楽しむようである。

社会生活をするうえでは、他人と関
わりない生き方はできないが、Aさんは、
その関わりにおいて自分のおしゃれがま
ず関わるきっかけとしての

ツールにしているようである。

おしゃれが、人との関わりにおいてそれを円滑に進めるものとしてのツールであるとするれば、障がい者・健常者に関わらず生活の質を向上させるものであると思われる。

(財)日本レクリエーション協会はレクリエーションの最終的な目的として、「個人の主体的な活動を伸ばすことにあり、自己実現と個性の発揮の機会となることにその最終的な目的がある。」¹⁰⁾としているが、まさにAさんにとってのおしゃれは、レクリエーション活動そのものであると思われる。

6)「障がい者が、もっとおしゃれを楽しむための課題」という問いに対して

① 回答結果

まず本人がおしゃれをしたいと望むことが一番であると答えた。そして、周りの人がおしゃれをすることを理解してくれることが大事と答えた。特に障がい者は、誰かの手が必要なことが多いので、その手伝いをする人のおしゃれに対するセンス^{註5)}も非常に重要になるといった。

これは施設の職員であったり、保護者であったり、介助者であったりするが、そのような人のおしゃれに対するセンスが障がいを持っている人とおしゃれの考え方の嗜好や傾向が似ている、または同じようであることが重要である。おしゃれのセンスが異なっていると本人が思うようなおしゃれができないので、障がい者のおしゃれに対して柔軟な考えを持って取り組み方を考えてほしいと語った。

さらに、障がい者がおしゃれをしていることに気づいてほめること、存在を認めることが障がい者にとって嬉しいことであると話した。些細なことであるが一言で良いから声をかけることをで社会が変わるのではないかと付け加えた。

② 考察

障がい者は、介助が必要な場面が多いため、やはり介助する人、家族、施設職員など周りの理解とおしゃれに対して本人の考えに沿った柔軟な考え方が必要であることは確かである。些細なことからもよいので障がい者がどのようなおしゃれをして生活をより豊かに楽しみたいのかを知るようにするという意識が常に必要であると思われ

る。

Aさんの場合は、視覚に障がいを持っているが、おしゃれに対してはほぼ自分で思うようにできる。しかし、そうでない場合は、周りのおしゃれへの配慮が欠かせないと言える。

さらに、おしゃれをしていることを周りの人が褒めることは、その人自身の存在を肯定することにもつながるので、特に重度の障がい者にとっては、非常にうれしいことではないかと考えられる。おしゃれを意識して行い実施することは障がい者のQOLを高めることにつながる。

おしゃれの意識を高め周りの人が理解を示すことは、障がい者の存在を肯定することでもあり、社会的に孤立化しやすい障がい者を社会全体で受け入れようとするにもつながり、障がい者を孤立化させないようにすることに関連してくる。

岡田(2006)¹¹⁾は、「孤独であること、社会的に孤立していることは、一般に人の身体的、精神的健康に否定的な影響を及ぼすことが知られています」と述べているが、孤立しやすい立場にある障がい者にとって周りの人が、支援することはより健康的な社会生活を送る上で欠かせないことであると考えられる。

7) 総合考察

インタビューを通してAさんが、おしゃれに対して非常に積極的な意識を持っていることが明らかになった。

Aさんにとってのおしゃれは、社会生活をするうえで欠かせないツールとして、また、存在を肯定する要素の一つとして使われているようである。

Aさんは、スポーツの場面においてもこれまで非常に優秀な成績を上げておりそのことだけでも存在意義を見出しているはずである。

また、おしゃれをすることにより他者の好意のある助言を受けたりする関わり通じ自分の存在を確かめているような印象を受けた。

前回の筆者の研究⁴⁾では、肢体不自由者で車いすでの自宅生活を送っている女性にインタビューを行ったが、本研究の対象者であるAさんにも共通して、おしゃれに対する意識が非常に高いことがわかった。

4. まとめ

本研究では、「障がい者は、本人と介助者がおしゃれに対して特に高い意識を持たない限り、身体的状態、社会的環境がバリアとなりおしゃれに対して消極的になってしまう」との仮説のもと、視覚障がい者Aさんを対象としてインタビュー法によりおしゃれの意識について調査した。

Aさんの事例により視覚に障がい者があっても、積極的におしゃれを楽しみQOLを向上させている様子が事例的ではあるがとらえることができた。

これは、本人のおしゃれに対する高い意識と寮生活ではあるがほとんど自立生活ができていることによるものと思われる。また自家用車の運転はできないが、公共交通機関を使い、わからない道は他人に聞くことが容易でありそのこと自体はバリアにならずおしゃれを楽しむことができる要因であると思われる。

もっと重度の障がい者や、難病の方の場合はどうかと聞いたが、障がいや、病気を治すことよりも、おしゃれをすることは簡単で手軽にできると言っていたことが非常に印象的である。

障がいの進行や、病気が悪化していく中でもおしゃれは工夫次第でそれらの改善や治療よりも簡単であると考えられる。しかもそのことがQOLの改善にもつながるというAさんの考えは建設的であり、これはAさんの日ごろから人生に対して前向きに生きている生き方から出た言葉であると思われた。

そして、Aさんは、少ない出費でも多様なおしゃれが可能であることを強調している。

また、Aさんは介助する人の理解とおしゃれに対するセンスを強調したことから、おしゃれをする際に、自分の意思をうまく伝えられない人の支援についてどのような課題があるかを明確にする必要性を感じた。

今後の研究課題としては、障がい者の意識調査の蓄積を行いながら並行して介助する人や家族など周りの人の障がい者のおしゃれに関する意識調査も必要であると感じた。

註

註1)「障害者」の記述については、「害」の漢字

を偏見ととらえられることがある。よって本論文では、ひらがなの「がい」を用いた。ただし引用文献については、そのまま引用した。

そのため「障害者」と「障がい者」の両方が用いられている。

註2) 本研究では「おしゃれ」の定義を、髪型、化粧、服装など身なりに気を配ること(さま)。また、そのような人をもいう。さらにその人の所持品(カバンや携帯電話等)も含む。

註3) 本研究においてQOLは、Quality of Lifeの略語として「社会的な場面から見た生活の質」と定義づけた。

註4) 網膜色素変性症
遺伝的に網膜の視細胞、色素上皮細胞が壊れていく病気。国の特定疾患治療研究事業対象疾患(難病)指定されている。症状としては、幼少期より夜盲、視野狭窄、視力障害がおこる。長期にわたり徐々に進行し、それと一致して視野欠損、視野狭窄が起こる。白内障や緑内障を併発することも少なくない。視野は中心だけ残して著しく狭窄してついには失明する。¹²⁾

註5)「センス」について、ここでは美的感覚や感性とした。

引用文献

- 1) 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課 平成18年身体障害児・者実態調査結果：2008年 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/shintai/06/dl/01.pdf> P3
- 2) 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部 平成13年6月1日調査 身体障害児・者実態調査結果：2002年 www.mhlw.go.jp/houdou/2002/08/h0808-2.html
- 3) 倉本智明「弱視は全盲よりしんどい?」『点字毎日』1997.12.28+1998.1.4 合併号 p26-27、毎日新聞社、原文点字：1997年1998年合併号
- 4) 大森宏一、「障がい者のおしゃれの意識についての一考察」日本レジャー・レクリエーション研究第64号：p39-47、2010年

- 5) 岩波君代、「みんなのねがい No.335」全国障害者問題研究出版：p12 1996年
- 6) 藤田裕一「先天性身体障害者における心理・社会的研究の動向と展望—二分脊椎症者に焦点を当てて—」日本保険医療行動科学年報：p179-180 2010年
- 7) 本山俊一郎・岡崎祐士「青年期の身体」長崎大学生涯学習教育研究センター（編）身体論の現在 大蔵省印刷局：p57-69 1996年
- 8) 松崎有子「身体像」清水凡生（編）総合思春期学 診断と治療社東京：p58-63 2001年
- 9) (財)日本レクリエーション協会（編）「レクリエーション支援の基礎」日本レクリエーション協会：p23 2007年
- 10) (財)日本レクリエーション協会（編）「レクリエーション支援の基礎」日本レクリエーション協会：p23-24 2007年
- 11) 岡田勉「よくわかる青年心理学」白井利明（編）ミネルヴァ書房：p90-91 2006年
- 12) 堀原一、細田瑛一「新家庭の医学」：p425、2005年

（受付：2011年6月13日）
（受理：2012年1月16日）